

報告⑤

「新型コロナウイルス感染症下の  
大学教育と研究活動」

鈴鹿大学大学院国際学研究所  
細井和彦

令和3年度アジア情報関係機関懇談会  
令和4年2月18日(金)

# 鈴鹿大学の簡介

- ▶ 1. 1994年開学 地方の小規模私立大学
- ▶ 鈴鹿「国際」大学
- ▶ 2. 国際学部 2学科でスタート
- ▶ 国際関係学科/国際文化学科
- ▶ 現在、国際地域学部・こども教育学部の2学部体制

# 教学環境の改善と新型coronavirus 感染症の流行

- ▶ 1. 2019年度から情報教育の改善 SOCIETY5.0
- ▶ 2. 情報システムの入替えを計画中
- ▶ サイボウズ + CAMPUSplan から **GoogleWorkspace** + CAMPUSplanへの変更
- ▶ 2019年末から武漢で新型の感染症が発生←goodtimingではあったが混乱は必至と予感
- ▶ 一連の卒業行事の中止

# ONLINE形式での開講準備に追われる教学 (驚愕)部門と教員 2020年度前期～

- ▶ 1. 情報教員によるGoogleの講習会開催→3月半ば直前
- ▶ Gmail・GoogleMeet・ClassRoom・Form・Document
- ▶ 2. ソフト面：初歩的なONLINE授業の方法学習/習得
- ▶ 基本形：
  - ▶ 資料配信＋課題提出で事前学習 課題採点返却で事後学習
- ▶ 3. ハード面：補助金の活用
- ▶ PCの貸与（100台） 学内無線LANの再整備

# 2020年度前期から後期、2021年度、現在 －ONLINE授業の継続

## ▶ ONLINE授業の方法

### ▶ 1. 演習－MeetによるONLINE

### ▶ 2. 講義－資料提供型形式 On Demand

### ▶ 3. 学生と教員の相互疲労

▶ 日常化するデジタル媒体とのにらめっこ（学生・教員）

▶ Meetの向こうで何してる？（教員）

▶ 慢性的な課題過多（学生）

# ONLINE形式に対する学生の反応【1】

- ▶ 1. 入学式の中止 2020年度入学生の満足度低下傾向 学  
費返却要求の声 第57回(2021年秋実施)学生生活実態調査 速報
- ▶ 2. 遠隔授業アンケート 鈴鹿大学
- ▶ (2020年6月24日～7月8日)
- ▶ 回答数411件(含む短大部)
- ▶ GoogleForm 【抜粋】
- ▶ 3. ONLINE形式の授業の功罪を示している

# ONLINE形式に対する学生の反応【2】

- ▶ ①ONLINE授業受講時の使用デバイス
  - ▶ スマホ82.2% PC37.2% タブレット10.7%
- ▶ ②ONLINE授業の受講科目数
  - ▶ 9－12科目65% 6－8科目16% →科目過多
- ▶ ③meetを使用する授業を受講しているか 90% →よい97%
- ▶ ④ClassRoomによる資料・課題提供型授業を受講したか 受講97%
  - ▶ →よい98%
- ▶ ⑤適切なONLINE授業のタイプ meet20% ClassRoom37% mix型24%
- ▶ ⑥授業以外の学習時間 増加53% 減少15%

## ONLINE形式に対する学生の反応【3】

- ▶ ⑦ONLINE授業のトラブル
- ▶ スマホにアプリを入れて操作できるまで時間が必要だった。
- ▶ 課題の提出方法がわからなかった。ドキュメントが書き込めない。
- ▶ 電波の状態がわるくなり、meetが切断された。
- ▶ 課題だけでは意味がわかりにくかった。
- ▶ 分析：基本的には全国共通の普遍的課題
- ▶ ONLINE形式初体験の弊害
- ▶ ハードの問題



# ONLINE形式に対する学生の反応【4】

## ▶ ⑧ONLINE授業受講の感想

- ▶ ONLINE形式の授業は成立しているが、やはり対面式授業の方がリアルタイムでやり取りが可能でスムーズ。
- ▶ 遅刻欠席がなくなったが、授業の形態が異なり、それらを整理しながら課題を提出するのが困難。
- ▶ 教員とクラスメートとのコミュニケーションがなく、大学に関する情報が少ない。
- ▶ 留学生は日本語レベルの問題もあり、詳しい説明がないと内容を理解できない。
- ▶ 課題が多すぎてすべてを満足にこなせていない。
- ▶ コスト面が気になる。

# 研究活動への影響－2020年以降

- ▶ 1. 2020年度前半：学会と研究会の延期
- ▶ 2020年度後半：ONLINE開催への移行～現在進行形 主にZoomによる
- ▶ 便利になった面、不便になった面
- ▶ →自宅で気楽に参加 失われる交流の機会
- ▶ 2. 渡航制限による国際学会の中止
- ▶ 一部ONLINE形式での開催
- ▶ 発表者の参加学会も中止 2022年度も不確定
- ▶ →学術交流途絶える 中国からの情報の欠乏状態

# 資料(史料)収集の制限を補うデジタル資料

- ▶ 収集作業の時間を効率化したデータベース
- ▶ データベースの多種類化と多様化
- ▶ ◆研究環境に格差が生じている。
- ▶ 「持つ機関と持たざる機関」
- ▶ 「資金力の相違」
- ▶ 「高額データベースの真の価値の有無？」

# 資料(史料)収集の手法としての、 デジタル＋アナログの有効性

- ▶ 1. デジタル化は効率化=時短
  - ▶ データベース＋デジタル資料の検索→図書館へ
- ▶ 2. アナログは五感をともなうコミュニケーション
  - ▶ 書籍、雑誌新聞の実物を手に取ることが可能
  - ▶ →対面であること
  - ▶ →視覚・触感・嗅覚 質感・重量の実感
- ▶ 3. 過去(従前)のアナログ＋現在(～未来)のデジタル

# 今後の図書館/資料(史料)館について

## ▶ 1. 図書館にある二面性:

▶ ①厳粛性－公共的/開放的 規則/静粛

▶ 図書館は「生の現物」を見て体験可能な場所 専門図書館

▶ ②寛容性－利用者が気軽に集える場所（居場所）として

▶ 大学－ラーニングコモンズ併設 学習会/ゼミ/講義実施

## ▶ 2. 求められる国際化と多様性

▶ 情報発信と情報受信による相互交流

▶ →顧客（利用者）拡大と賢い消費者（選別）

# おわりに

- ▶ 求められる利便性－関西館の演習室で集中修論指導
- ▶ 期待される役割
- ▶ 第57回(2021年秋実施)学生生活実態調査より
- ▶ 「オンラインと対面が併用されています。大学側からオンラインは原則自宅で受講するよう言われているため、友達がその通りに帰るが、私は通学時間が長く、結局大学でオンライン授業を一人で受けている状態です。仕方ないことだが、孤独で大学に行くことに対して積極的になれなかった。図書館の設備（自習スペース）が良いことが唯一大学に行きたくなる要因です。（2年/女性/自宅）」

▶ ご静聴、ありがとうございました